

平成 11 博卒 スルヤ ラジャ アチャラさん



Dr. Surya Raj Acharya (平 11 博、測量研)
Spokesperson of Sajha Party, Nepal
※スルヤさんより、2017 年 5 月 27 日付でサ
ジャ党のスポークスマンに就任したお知ら
せをいただきました。
President of Institute for Development and
Policy Studies,
Visiting Professor of Institute of
Engineering, Tribhuvan Univ.
G. Secretary of the Society of Transport
engineers, Nepal.

インタビュアー：赤池あゆこ
平成 29 年 3 月 2 日、
工学部 1 号館セミナーCにて

写真 6：スルヤさん

● **なぜ日本で博士号を取ろうと思ったのでしょうか。**

私は AIT（アジア工科大学）で修士号を取得した後、バンコクの国連事務所で働き、その後ネパールの政府で働いていました。当時シビルエンジニアはインフラの構造計算をするのが仕事でしたが、国民の生活を本当に豊かなものにするためには、政策などのソーシャルワークの方が重要であると感じました。国連事務所での仕事の時に、インフラ整備のためのマネジメントの研究が真っ先に進んでいた日本に興味を持ち、日本のことを勉強しました。日本の歴史を学んでみると、今のネパールのように最初は貧しい国であったのが、シビルエンジニアの力もあって発展してきたことを知り、日本で勉強したいと思いました。そんな時に中村英夫先生（昭 33 卒）に学会でお会いし、研究室に誘っていただき、東京大学で博士号を取ることにしたのです。

大学の学部はどこを卒業しても構いませんが、博士号は違います。まったく新しいこと、オリジナリティを追求するためには、やはり国で一等レベルの大学に行かなければなりません。アメリカなら MIT、イギリスならインペリアルカレッジでしょう。

私は中村先生のご退官の年に博士課程に入学し、その後中村先生の後を引き継いだ森地茂先生（昭 41 卒）にお世話になりました。二人とも教育が素晴らしいことは言うまでもないのですが、その人柄にインスパイアされました。

● **日本に家族を連れて来日されましたね。**

私は、妻と二人の子ども（当時 5 歳の男の子と 2 歳の女の子）を連れて来日しました。ネパールから日本に留学した先輩からは、奥さんは連れて行っても、子どもはネパールに置いて行った方がよいとアド

バイスを受けました。しかし、私は日本の小学校の教育システムを事前に調べ、子どもの教育にもメリットがあると思いました。日本の小学校では、片づけをする、赤信号をきちんと待つ、といった社会生活のマナーから始まって、「一年生になったら友達百人できるかな」の歌にもある通り、友だちのいる大切さ、社会性まで教えてくれます。ネパールや他の国の小学校では、読み書き以外はあまり教えません。そのようなわけで、子どもたちは二人とも三郷市内の公立小学校に通わせていました。一方、中学生になると勉強の方が大事になってきましたので、転居して都内のインターナショナルスクール (St.Mary's International School, Seisen international school) に通わせました。英語は、小学校の時から私たち夫婦が自宅で教えましたので、子どもたちは二人とも日本語、英語、ネパール語をしゃべることができます。小学校までは言葉の心配をすることはありません。むしろ、自分の母国語と母国の文化をしっかりと教えた方がよいと思います。

子どもたちが日本で受けた教育は、国際性を身に着ける機会を与えることになりました。子どものうちに国際的な体験をすることはとても貴重です。

● 研究で大変な時にはどうしていましたか？

子どもの病院への付き添いや教育のことなどで、大変な時ももちろんありましたが、家族と住むことが、良い意味で気晴らしになりました。それに、論文で忙しく家に帰れないときでも、家族が不平を言わずよく理解してくれたことも良かった点です。

● 博士号取得後も日本に 12 年滞在されましたね。

最初はネパールに戻るつもりでしたが、PhD 取得後ちょうど 2 年間 JSTS のプロジェクトがありましたので、ポストドクターとして森地研に残りました。

博士号はインフラと地域開発に関するダイナミックモデルの提案でしたが、政策レベルで実行可能なものを研究するのも大事だと言われました。当時、ネパールの政治情勢が混乱していたこともあり、実際の現場経験も必要だと思いましたので、中村先生が所長を務める運輸政策研究所の主任研究員として国際プロジェクトの研究チームに入りました。研究所ではゼミのオーガナイザーや様々な交通テーマでセミナーを開きました。交通問題の政策レベルでの課題を多く学びました。

ネパールの政情が安定しないこともあり、結局 2001 年から 2013 年まで日本にいました。それは子供たちの卒業を待つためでもありました。

2012 年、息子は高校を卒業し、娘はインタナショナルスクールを卒業しました。息子はその後ネパールの国立大学に進学し、マネジメントを学び、インドにある日立製作所で 2 年働いた後、24 歳でネパールに会社を作りました。会社を立ち上げて 1 年、今年 25 歳になりました。大学時代も JICA の現地代表を招いてセミナーを企画し、日立では日本人の知り合いをたくさん作り、そこで築いた人脈で自分の会社を作りました。

日本で生き抜いてきたことは、今の彼に自信を与えたのです。

● ネパールに帰った今のお仕事は？

私は今、トリブバン大学の特任教授や国会の開発委員会に専門家として呼ばれています。自らネパールの交通問題を考える団体を立ち上げ、代表をつとめています。テレビや雑誌にも積極的に取材を受けて、ネパールの人々の道路に対する意識を変えようとしています。

今は人口 4000 万の首都カトマンズにメトロを整備する提案をしています。ネパールでは交通はまだ運ぶための道具でしかありませんが、私はそれが国民の結束を強める政治的手段になることをアピールしています。

日本のインフラは世界一です。問題もたくさんありますが、貴重な経験をたくさん持っています。ネパールはまだすべてにおいて、弱い国です。そこで、日本で学んだことを持ち帰ってマスメディアを通じて伝えたいと思っています。PhD を取得して、一番役になったのは、自分の思いをロジカルに伝えることができるようになったことです。ロジカルでなければ多くの方は耳を貸してくれません。ロジカルに考え、注意深く検証し、自分の意見を科学的に伝えることを博士課程で学び、それを今生かしています。

- 若い学生へのメッセージ

今から 30、40 年前は、エンジニアの仕事は計算をすることでした。しかし、今それはコンピュータに任せることができます。私たちは論文を書くことだけに目を向けるのではなく、もっと広い視点、政策、経済、社会、観光を視野に入れて考えるべきです。視野を広くしておけば、大学は多くのチャンスを与えてくれます。東京大学は日本のトップであり、力の中心であり、日本の心そのものなのです。特に留学生には研究テーマとは別に日本の歴史などさまざまなことを学んでほしいと思います。

- 最近掲載されたスルヤさんのインタビュー（英語）はこちら↓

<http://www.myrepublica.com/news/13145/>